

力づく、拍子も正しくとれていたで、クラスの子どもたちが自然にそれを認めH児には生活指導の中で話し合いをし、力もちでタイコも上手に打てるのだから、友だちのいやがる乱暴はしないことなど約束した。H児は「タイコさんが休むと楽隊あそびが出来ない」といって楽しんで登園し、自信もついたようである。

このように保育してH児に感じられることは、H児に腕力で対抗する者のいないクラスであるからなおのこと、よい意味のリーダーになるよう方向づけねばと思った。また結果としては乱暴は悪いが、体力のあり余るH児は案外素直であること、わがままとばかり思われる乱暴の中にも理由のあることなど感じた。(東京・八幡幼稚園)

## B 乱暴な子ども

ここに掲げられる「乱暴な子ども」は、やはり、家庭の中に歪みがあるようである。その原因ははっきりしない

が、子どもは愛情を欲しているようである。そこで、おとなの注意をひくために乱暴をする。この例で指導上特に留意していることは、

「子どもの信頼をえて、指導する」ということである。このことはどの場合にも、共通に通用することであろうが、この例ではこの態度が成功に導いている。

また、自分の行動が他の子どもにどのようにめいわくをかけているかを知ること、それによって、他人の存在を自覚することが、子どもの行動を向上させるのに役立っている。

## 乱暴な子どもの指導

### 荒谷 昭子

A君(入園当初四才男児)は父母と三人暮らしで通園に三十分位かかる野道を歩いて来る。この子の問題は何事もないところから起ってくる。それも毎日のように……。

人が通りかかっても傍にいても、つねたり叩いたりし、その為に子ども同志では最初全然友だちではなく誰も傍へ寄りたがらない。教師が少しでも注意すると手を噛み、叩き、蹴り、ツバをかけはじめ、それでいてにやりと笑うようすは少し異常なほどであり、他の子どもがびっくりにしてみている位であるが、原因が何もなくとも始まるので、その起ってくる正体が掴めずに、変った子だと悩んだ。勿論それが起った時は反抗が終るのを待ち、いけない事であることを認めさせて最後は「ごめんなさい」と謝るのだが、決して心の底から自分のしている事がいけないとは思っていないようであった。ひとりっ子なので、家で放られているはずもなく、いじめられてもいないはずであるが、ある日母親に家での様子をきいた。すると、小さい時から祖父母の傍で同居していてもあまりかわいがりすぎ、父母が親としての教育が出来ず困った末に家を借り、祖父母から離れることにして、その為幼稚園に来たことがわかった。その時もいっしょについて来て母にも同じようにすぐ手を出

し攻撃を加えているのをみた。これは氣長に治さなければと思ひ、それから話しかけられれば出来るだけ相手になつて聞いてやりつねつても笑つてすませて、そんな痛いことは誰でも嫌なのよというようにして單に手を放すようにし他の子には目立たないようにした。人を噛みにくるかと思へば、花を摘んでもつてきたり、虫を見せにきて注意をひこうとする。彼はすべての人の愛情を求めているのを思ひ、なるだけその心に応えるようにしてやつた。幸い登園が早いので他の子があまり来ていない間に話合う機会が得られた。その中に朝来るとすぐ寄つてきて、笑顔で「あのね」といろいろな事を教えてくれる。次第に彼は自分の人に対する態度が悪い感じを与え、自分がいけないことをするのだということを少しずつ認め出し、友だちとの衝突も少なくなつてきた。初めは徹底的にその非を皆の前で認めさせるようにした（なぜなら皆の前で事を起すのであるから）。しかし、だんだんその耳許で当事者だけの間でそつといいきかせるようにし、特に、とりあげないよ

うにした。原因がたあいもないことで、後はケロリと忘れていくようである。それがほとんどなくなつて口で表現出来るようになり、子どもたち同志で理解し合うようになつた。それでいてその後も、傍を通りすがりに教師の手をちよつと叩くようにしてゆくが、それは見上げて笑ひながら自分の方へ認めさせたためのものでしかないのである。笑ひ返しながら、ともだちとも大分円満に交わるようになったことを喜んだ。

性格という精神面を導こうとする時は指導者は「先生対子ども」というよりは同じ心に立つた親しい結びつきによる信頼を得て初めて、「どう扱おうか」という問題に進められるのであつて、離れた立場や上からの立場では決して子どもの心深くにまで訴えることが出来ないと思う。そして、子どもの心と固くつながる時は何気ないところに案外ひそんでいるのを感じることがある。

初めはいくら反応がなくなるとも、單なる挨拶だけでなく一言でも「その子のためのこ

とば」を各々声かけてやることは、少しづつでも固さをとかして、心を柔かくさせることが出来るであろう。それに、視線が合うことからの親しさもことば以上に理解されるもので、初めの頃はすぐ下を向いてしらん顔をしているが、しばらく経つたある日には微笑み返ししながら、応えてくれるようになり、また何日か経つた時には、笑ひながら登園の道すがらの事や家での事などを話せるように変わってくる。そうなつてきた時に一言の注意でも心に伝わるのは早くなる。

皆が園に慣れ、きまりや約束が大体納得されてきた頃には、もう目の前で解決のつくことが多くなる。C君の例をみると、三、四人で積木遊びをしていたCたちの所へ割込んできたDが、積木の自動車をこわして他の事をしようとした時、Cは「こわすな」と怒つても、「もっといいのを作ろう」とDが強引に奪つていく。「だめ」と泣きじゃくりながら手を挙げて殴りかかろうとしたその時に、初めから見ていた教師の目とぶつかった。Cは振り上げた手を下

し、泣き声を小さくしようと努めながら、「僕が折角作ったのに壊したらだめ」と抗議はじめた。Cはちょっと笑いかけて私の目から、自分の正しいことを認めてくれているのを感じ、またいくら自分が正しくとも手を挙げ相手を殴ったり泣くことはよくないこともとつさに悟ったのである。Dも私の目に気がついた。そして積木を徐々にもとへ戻そうとしかけた。皆の心にも、すでに理解されているのが見えた頃に近づいて話合えば、Dは「ごめん」といいながら積木を返して、Cの作った自動車に乗った。その時、もうCは笑い顔になって自動車の運転に氣をとられはじめている。何事も泣くことでしか表現出来なかったCに、泣いた時は構わずにいて元氣な時にいっしょに遊び、話したりしてその時のCがいい子であるのをわからせていく中に、Cは次第に泣きじわが消え笑顔が多くなっていき嬉しく感じないではいられなかった。子どもにとっては一番欲しい「明かるさ」が得られたのであるから。

一時的な不満や欲求は、同じように一時

的な方法で解決出来るが、固定されかけている性格を良く導こうとするときは、よほどの忍耐と、子どもからも信頼された正しい愛情をもって接しなければなかなかむずかしいことである。それでもなお、教師としての立場の限界を知らされ成功しないこともあり、家庭の協力が重要な役割をもっていることを痛感、家庭の人たちにも認識していただきたいと願わずにはいられない。

(大阪・梅花幼稚園)

### C 落着かない子ども

ここに、二つの「落着かない子ども」の例が掲げられている。A君の場合は、子どもの遊びに対しておとなが干渉しすぎ、熱中して遊ぶ暇がない。B君の場合は、家庭内で人間関係が不安定である。このような子どもに対する指導上の留意点は自らに明きらかである。

## 落着かない

### 子どもの指導

久保田 敦子

A君は、ある程度自分が中心になって何もしなければ、すぐに他の子どものやっている事をかきまわして、「こわしてしまおう。しかしリーダーとしてまとめることは出来ない。遊びや仕事に長い時間とりつけずました仕事や遊びをしていても他の事に気がちりそのものに熱中出来なかった。家庭では祖母が長男であるのでかわいがり、それと同時にする事なす事に口を出し、母親も祖母の手前おとなしくさせようとするさく言うので一つのものにうちこめない子どもになってしまったらしい。それで何か熱中して出来るものをさがしてA君の遊びをその熱中出来るものにうちこませた。積木の中でもいろいろ組合わせて創造性のあるもので「うちこみ積木」であった。これに熱中している時には何もいわずそっとそのまま